

待降節第3主日礼拝説教

「キリストは飲み食いするのか、しないのか？」予稿

日本基督教団石神井教会 2020年12月13日

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 4章4～9節

⁴主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。⁵あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。⁶どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。⁷そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

⁸終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。⁹わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

【福音書日課】マタイによる福音書 11章2～19節

²ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、³尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」⁴イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。⁵目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。⁶わたしにつまずかない人は幸いである。」⁷ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒野へ行っただのか。風にそよぐ葦か。⁸では、何を見に行っただのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。⁹では、何を見に行っただのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。

¹⁰『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、

あなたの前に道を準備させよう』

と書いてあるのは、この人のことだ。¹¹はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。¹²彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。¹³すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。¹⁴あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は

現れるはずのエリヤである。¹⁵耳のある者は聞きなさい。¹⁶今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。

17 『笛を吹いたのに、

踊ってくれなかった。

葬式の歌をうたったのに、

悲しんでくれなかった。』

18 ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、¹⁹人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。」

喜びなさい【こども説教のために】

「待降節」の第三主日を「喜びの日曜日」と呼ぶ古くからの習慣に倣って、今日灯された「アドヴェント・キャンドル」の三本目は、「バラ色」のロウソクが立てられています。「待降節」のシンボルカラー（典礼色）は、「悔い改め」の意味が込められた「紫色」ですが、その中ほどの一日を、「喜び」の意味を込めた「バラ色」で記念しているのです。御子のご降誕を祝う「クリスマス」はまだ先ですが、すでにそのことを知らされているわたしたちは、そのときを待ちながら、心の内でもはや隠すことのできない「喜び」の思いを言い表してもよいのです。

わたしたちにとって「喜ばしいこと」は、突然訪れて来ることもあります。あらかじめ分かっている場合もあります。むしろ、あらかじめ分かっている「喜ばしいこと」を、わたしたちは、決まった「祝い」として記念し、確かめる、ということをするのです。「祝い」のために良い備えをすることで、わたしたちは、「喜ばしさ」をますます深く心に感じ、また互いに分かち合うことができるのです。良い備えを怠れば「喜ばしさ」は半減してしまいますし、「喜ばしいこと」は多くの人と互いに分かち合ってこそ本当に「喜び」としてわたしたちの心と体を躍らせることになるのです。

「御子のご降誕」を祝う「クリスマス」を、本当に「喜ばしいこと」として迎えるために、備えのときである「待降節」の中ほどに「喜びの日曜日」が置かれてきました。「喜ばしいこと」のために共に備えて過ごすことそのものが、わたしたちの中に「喜び」を育んでいるのです。

使徒書日課（フィリピ4章）でパウロは、「常に喜びなさい」と繰り返し勧めめています。「主が近い」ことを本当に「喜ばしいこと」として分かち合える祈りの友同士であるからこそ、パウロはそう勧めているのです。

主はすぐ近くに…

新型コロナウイルスへの対応で、わたしたちの「クリスマス」の祝い方も、見直しを求められてきました。これまで「祝い」のために集まっておこなってきた当たり前のことが、ことごとく避けたり控えたりすべきこととされているのです。これまで、わたしたちが、礼拝にしろ祝いの会にしろ、集まって互いを近くに感じ合いながら過ごすことを、どれほど当たり前にしてきたか、思い知らされているようです。

このような状況下に置かれたとき、主イエスならばどのようななさるだろうかと、いつも考えないではいられません。

答えは明瞭で、主イエスならば何よりも「いのち」を最優先なさっただろうと、お考えになる方もあるでしょう。わたしも、それが第一の答えであろうかと思えます。けれども、その「いのちを最優先にする」というのは、何を以て言えるのか。福音書の伝える主イエスの振る舞いや教えを読み直すとき、答えはそれほど単純ではないと、わたしは思うのです。

主イエスの時代、ユダヤ人が「律法」の定める「食物規定」を守り、自分たちの社会を構成する「仲間」ではない「異邦人」や「罪人」と食事を共にしなかったのは、ただそのような決まりだったからというだけではなかったでしょう。そうすることで、彼らは自分たちの「いのち」を守っていると考えていたのです。「病人」が「罪人」とされて「仲間」から疎外されたというのも、当時の人びとからすれば、自分たちの「いのち」を守るために腹を括って徹底しなければいけないことだったはず。「病人」と食事や生活を共にすれば、自らも「病気」に冒される危険があることは、古代人にとっても自明のことでした。

主イエスは、そのような「生活様式」が社会制度としても社会人の常識としても徹底されていた時代のユダヤ人社会にあって、「いのち」のあり方を問われたのではなかったのでしょうか。「徴税人や罪人」を「仲間」としてご自分の食事の席に招き入れ、病人や死者にも触れることを厭われなかったのです。「大食漢で大酒飲みだ」と揶揄されるほど誰とでも飲み食いされたと言われるとき、主イエスの行動は「いのち」を蔑ろにするものだと批判されていたのです。しかし、そうなのでしょうか。

主イエスは、むしろ、「いのち」を守るという建前の中でかえって失われかねない、蔑ろにされかねない「いのち」が、人々の目から隠されたところに追いやられ、葬られていることに、目を向けられていたのではないのでしょうか。そのような「いのち」の一つひとつにこそ、近づき、共にいることで「いのち」を回復なさろうとされたのではないのでしょうか。それだからこそ、大いに飲み食いをもなさったのではないのでしょうか。

「来たるべき方」

もちろん、わたしたちは、だからと言って、教会が今の状況下でも以前のように大いに飲み食いをする集まりをするべきだ、と考えるわけではありません。主イエスが「見ろ、大食漢の大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」と呼ばれてもなさったという飲み食いが何だったのかを、あらためて問い直すのです。

実のところ、わたしたちの人間関係で生じる問題の多くが、互いに近づきすぎることで起こってくることを知っています。相手の領域を侵して、わたしたちは、ときに良かれと思って、ときには悪意を隠して、踏み込んでしまうのです。わたしたちには、決して人に入り込まれたくない領域というものが、物理的にも心理的にも、あるのです。互いの間に健全な境界線が設けられているときだけ、わたしたちは、相手に対して敬意をもって接し、良い関係を築いていくことにもなるでしょう。だからこそ、わたしたちは、子どものころから成長するにしたがって、社会で共に生きていくためには互いに距離を保つことが必要だと学んできたのです。

けれども、このわたしたち相互の距離の取り方は、必ずしも一定ではないのです。いつも、相手との関係性の中で変化し続けます。しかし、その変化に対応することが、必ずしも上手ではないのでしょうか。だからこそ、ある人たちは、どのような相手とも、どのようなときでも、同じ距離の取り方を不変のものとして保ちます。いわく、「徴税人や罪人とは付き合わない。一緒に食事をしない」などと。相手も同様であれば、それでもよいのかもしれませんが。けれども、わたしたちは皆、変わるのです。昨日のわたしと今日のわたしは、同じではない。今日のわたしと明日のわたしも、同じではない。置かれた環境も変われば、心の持ちようも変わるのです。それに対して、周りが変わってくれなければ、わたしは、どうしたらよいのでしょうか。

主イエスは、そのような者のところにおいでくださる、というのではないのでしょうか。そのような、移ろいやすい小さな者のところに、神は共にいてくださると、主イエスはおっしゃられたのではないのでしょうか。そのことを、主ご自身がおいでくださることによって、その小さな者をご自身のもとにお招きくださることによって、お教えくださったのではないのでしょうか。いいえ、それだけでなく、わたしたち皆が、本当はその「小さな者」の一人として生きるしかないことを、明らかにしてくださったのではないのでしょうか。移ろいやすい小さな者には、いつも自ら変わり、近づいてきてくれる存在が、必要なのです。

使徒は、だからこそ言いました、「**主はすぐ近くにおられます**」と。神の御子は、わたしたちのすぐ近くにおいでになられます。